大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ミステリー小説の美女いろいろ：比較文学的に考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/14527

第１回講演

ミステリー小説の美女いろいろ

――比較文学的に考える――

堀江　珠喜

過去30年余り、私は「悪女」について執筆や講演を行ってきた。もともと「悪女」とは「醜女」を意味したのだが､今はその逆で「魅力的な女性」のイメージを抱かせる言葉となった。つまり容姿は「美女」なのである。では「美女」が「悪女」であったとき、物語はミステリーの様相を帯びるのでは？そう考えて今回のテーマに至ったのである。もちろんミステリーにおいて、女性は悪役ばかりではない。いや、悪役より不都合な立場にある、すなわち被害者となることのほうが、むしろ多いだろう。

実際のところ探偵小説の初期には、男性に比べ体力的に弱い女性は被害者であった。それが時代とともに知恵を働かす加害者となり、やがては社会的地位を得て探偵役を果たすことになった。エドガー・アラン・ポーが元祖といわれ200年ほどの歴史しか無い探偵小説においては、このような役割の変化が女性の社会進出の様子と重なっているようで興味深いのである。

容姿についても、どこかの段階で「美」が強く求められるようになったのではあるまいか。そこでミステリー小説における美女たちを取り上げ、彼女たちの受動的・能動的役割を考えることによって、時代とともに変化しつつある女性の立場について考えたいのである。

なお本論タイトルのミステリー小説とは「推理小説」を広義的にとらえたものとする。もともとは謎解きの探偵小説が主流であった推理小説も、

現在では犯罪心理や怪奇など本来の枠を超えたため、むしろミステリー小説との言葉を用いるのが一般的なのである。また英文学では小説と短編小説は別の文学ジャンルに属するが、ここでは両者に区別をつけず、いずれも同種の物語ととらえたい。さらに「美女」という言葉を使うのは議論の対象を女性に絞ることを強調したいためで、当然ながら題名や作中に「美人」とある場合も女性であるかぎりは「美女」と同義として扱うことにする。（おおまかなところ、女性を表す言葉とつなげる場合は「美人」が用いられる。例：美人姉妹。またその前に修飾語がつく場合も「美人」。例：死美人。さらに「美人」が修飾語となったとき。例：美人探偵）。

〈美女とは？〉

おそらく本論のタイトルに対し反感を抱かれるであろうことは覚悟している。「美女」はあくまでも外見だけの判断によるのであって、内面を無視した言葉として相手によっては「セクハラ」ととらえられることもある。いっぽう「綺麗」と誉められた女性の横で無視されたような立場の者が不愉快に感じるのも「セクハラ」とみなされることがある。だがここで敢えてこの言葉を使うのは次の理由による。

１．外見と内面が異なることも大いにあるからこそミステリーは面白いのである。
２．文学といえどもあくまで商品であるかぎり読者に受け入れられやすい（読者好みの）人物を創作するものである。そのため短期決戦型文学作品のミステリー小説においては、「美女」を登場させる傾向にあるのだ。
３．ときには「美女」とは若い女性と同義語である。

とりわけ犯罪やスキャンダルがからむと、ある程度の年齢までの「女性」は「美女」と書かれる傾向がある。井上章一が『美人論』で触れたように、明治期には「首なし美人」との新聞見出しまであったということである。確かに、神戸女学院中高部時代の同級生について『週刊朝日』（1987.4.10）

が「中京女子大美人学長（32歳）が“未婚の母”になるんだって!!」とのタイトルでそのスキャンダルについて報じたときには、我々は大いに不満だった。「美人」とは虚偽記載もはなはだしいと。（ちなみに高等学部の卒業生で私より20年も後輩になる現帝京平成大学学長は、まさに「美人学長」である。）

また『現代』1992年12月号によれば、当時は『女性弁護士シリーズ・美人OLグルメ殺人紀行』が視聴率を稼ぐ２時間ドラマの究極のタイトルであったそうだ。なかでも「美人」という言葉が視聴率を上げたようである。もちろん「美女」でもかまわないのだが、OLは女性に決まっているので「女」という字を避けたのだろうと推察する。確かにその後もこの「美人・美女」を用いて視聴率を上げようとの安易な手口はよく見かけられる。BS放送の開始後はコンテンツ不足で、再放送や再々放送されるサスペンスドラマも多いので、次のようなタイトルを日常的に目にする機会がある――『女医花橋澪子の事件カルテ・“復元”された美女のさけび』、『エステ美女連続殺人事件』、『美人OL殺し』、『美人秘書殺し』などである。近年は長い副題に入っていることもある――『愛と死の境界線――隣人は殺人者！悲しき美人妻と家族の絆、土地争いに隠された驚愕の真実を暴け』といったところである。このように「美人」や「美女」は安直な集客用語なのだ。

現代の報道に関しても、放送倫理・番組向上機構による『BPO報告』NO.128（2013.10.15）で「過去の殺人事件を取り上げていたが、被害者女性を『美人姉妹』と銘打って顔写真を出した上で、『性的暴行』という言葉を繰り返し、スキャンダラスに伝えていた。被害者のご家族や関係者が見ていたらどう感じただろうか。死んだ人間に配慮は不要なのか、甚だ疑問だ。過去の事件を振り返ったり、追跡報道する意義は大きいと思うが、せめて顔写真は使用しないという選択肢はなかったのか。」という声を紹介している。逆にいえば、「美人姉妹」でなければ、わざわざ過去の事件を掘り返す必要はなかったのではあるまいか。いつまでもアメリカの「ジョンベネ事件」が話題にされるのも、迷宮入りだからというためばかりではなくこれが美少女殺人事件だからであろう。

女性の美醜と犯罪との関係については、井上章一が同書でやはり大正期の寺田精一著『婦人と犯罪』（1916）から興味深い調査を紹介している。なんと女性犯罪者20歳以上40歳未満260名の美醜を５段階（美、上、中、下、醜）に分けその犯罪の種類との関連について分析を試みているのである。「我邦の婦人犯罪者を日常取扱つて多年の経験ある二人の女性に….婦人犯罪者の容貌の美醜を評価」してもらった結果だそうである。面白い発想による企画ではあるが、犯罪者のサンプル数が少なくしかもこの美醜５段階の判定基準も明確にされていない。いやできまい。品の有無によっても印象は異なるだろう。とりあえず寺田は「美人」とは「顔面の美なる者」と定義する。

察するに「中」が普通、十人並みで、「上」は普通より美形、美は誰の目から見ても美女、その反対に「下」は普通より少し不器量、「醜」は相当不細工となるのだろう。つまり日常生活で見かけるのは「上、中、下」であり「美」や「醜」はめったにいないことがうかがえる。さらに、若い女性であれば「美」から「下」までなら「美女」扱いされるのではあるまいか。「鬼も十八番茶も出花」とのことわざもある。事実、寺田は20歳未満の女性についても調査しているが、そこで「美」が多いことについて、美しく若い女性は男性からの誘惑が多く悪の道に入りやすいこと、また若いから美しく見えた可能性「年若く、血色もよく、観察者の眼に自然美しく見えたという事実もあつたてあらう」を理由に挙げている。

また現在なら「下」は「個性的美人」と称されるだろう。そうするとかなり美女の幅が広がる。また「美女」をキーワードに書籍の題名を検索すると最も多くヒットするのが『美女と野獣』であり、このタイトルで多種の書物が出版されているのは事実なのだが、「野獣の横にいれば誰でも美女に見える」と示唆されているようで面白いのである。美女とは実は相対的な存在だとも考えられよう。

つまり、誰でも美女になりうる、あるいは状況によって美女に見えるのだ。というより、絶対的な美女は文章では描写されにくいのではあるまいか。美しいといっても鼻が10センチも高いわけでなく、目の大きさの違いについても漫画ではないのだからしれている。陶智子は『不美人論』(2002)

で「世の中の八割は不美人」と述べているが、「実際に美人の割合を数値化したわけではないが」と美人の基準の難しさについても認めているのである。つまり差し引いて「世の中の二割は美人」も、おおまかな印象に過ぎないということになろう。また西洋の伝統的美女は真珠のような歯を持っているが日本の古典的美女について歯はポイントにならないというように、時代や地域によっても美の基準は変わる。（英文学では「さくらんぼ」は赤い唇を誉めるときに使われた。）

では実際のところ「美女」はどのように語られているのだろうか。ミステリー小説において美女の登場をチェックすると、その描写は次のようにお粗末なことが多い。

1.「絶世の美人」（江戸川乱歩現代語訳1956、黒岩涙香翻案『死美人』1891～2、フォルチネ・デュ・ボアゴベー原作『ルコック氏の晩年』）
2.「たいへんな美人」、「目くらむばかりの美女」（横溝正史『喘ぎ泣く死美人』1929）
3.「眼もさめるような断髪美人、肌理（きめ）の細かい卵色の肌に、表情が少年のようにすがすがしくて、美しい双眸（そうぼう）が宝石のようだ」（横溝正史「猿と死美人」1938）
4.「これまでに見たこともないような美人」（同上）
5.「大変な美人」（永井路子「眠れる美女」）
6.「楚々たる美人」（横溝正史「壷中美人」1960）
7.「これまでに見たこともなかったような美しい女性」、「信じがたいほど美しい顔」、「白人と黒人とを問わず、生まれてはじめて見るような若く美しい娘だった」（エド・マクベイン『美女と野獣』Beauty and the Beast, 1982）

まさに「絵にも描けない美しさ」の竜宮城を絵本の挿絵に描くのと同じくらい「美女」を言葉で表すのは困難なのであろう。だが、ひょっとしたら「美女」がある種の記号として使われ、これが出てくると深いことは追求せず各々が自分の思う「美女」を想像して納得するという条件反射に我々

は知らず知らずのうちに慣らされてしまったのではあるまいか。（人によっては「美女」ではなく単に若い女性が出てきただけで「美」を勝手に纏わせてしまうかもしれない。ちょうど芸者を「綺麗どころ」と呼ぶようにである。）

ミステリー小説の醍醐味は謎解きであり、人物描写は最低限でいいのかもしれない。だから「美女」は「美女」との説明で事足りるとも考えられよう。だが「美女」についての説明がなされないのは、純文学においても同様の傾向があるのだ。たとえば夏目漱石著『坊ちゃん』（1906）において、マドンナについては次のように語られる。まずは宿の御婆さんの言葉である。

> 「先生、あの遠山のお嬢さんをご存知かなもし….まだご存知ないかなもし。ここらであなた一番の別嬪さんじゃがなもし。あまり別嬪さんじゃけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと云うといでるぞなもし。まだお聞きんのかなもし」

これでは別嬪さんであることはわかるが、具体的に遠山のお嬢さんの特徴はわからない。実際にこのマドンナを見かけたときの「坊ちゃん」の説明でも不充分である。

> 色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんとが並んで切符を売る窓の前に立っている。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。

色白で背の高いハイカラ頭の美形女性という意外、読者にマドンナのイメージを固定させるような情報は与えられないのである。また三島由紀夫著『春の雪』（1968）でも聡子が最初に登場する様子は次のようである。

> 清顕はそこまで熱心に目で辿ってきて、水色の着物の女の横顔に、聡子の横顔をみとめて落胆した。どうして今まで、それを聡子と気づか

なかったものであろう。一途に見知らぬ美しい女だと信じ込んでいたのであろう。....岸の聡子はたしかに美しい女だった。しかし少年は断乎としてその美しさを認めないふりをしていた。なぜなら彼は聡子が彼を好いていることをよく知っていたからである。

やはり聡子の美しさは具体的にはわからない。まるで「美女」や「美人」という言葉がそれ自体で完結し、それ以上の具体的な説明を拒否し排除する力があるかのように思えるのだ。いっそのことなら美女でないという前提のほうが描写は細かくできるのかもしれない。その好例はスカーレット・オハラについての『風と共に去りぬ』（1936）の有名な冒頭部分であろう。

スカーレット・オハラは美人ではなかったが、双子のタールトン兄弟がそうだったように、ひとたび彼女の魅力にとらえられてしまうと、そんなことに気のつくものは、ほとんどないくらいだった。その顔には、フランス系の「コースト（海岸）」貴族の出である母親のデリケートな目鼻立ちと、アイルランド人である父親のあから顔の粗野な線とが、めだちすぎるほど入りまじっていた。しかし、さきのとがった、角ばったあごなど、妙に人をひきつける顔である。目は、茶のすこしもまじらない淡碧で、こわくて黒いまつ毛が、星のようにそのまわりをふちどり、それが目じりへきて心もちそりかえっている。その上に、黒くて濃い眉が、ややつりあがりぎみに、もくれんのような白い肌に、あざやかな斜線をひいていた。――この肌は、南部の女たちがひどく大切にして、ボンネットやヴェールや手ぶくろなどで、あのジョージアの激しい日ざしから、じつに注意ぶかく守っているものなのである。（大久保康雄・竹内道之助訳）

『風と共に去りぬ』はミステリーではないから書き方に違いがあるとも考えられるが、東野圭吾著『新参者』の「瀬戸物屋の嫁」（2005）でも美人タイプでない女性についての描写は細かい。

麻紀は水色のミニのワンピースを着ていた。それが小麦色の肌によく似合っていた。美人タイプではないが、愛嬌のある目が印象的だった。会話も上手く、尚哉のさほど面白いとも思えない話でも、真剣に目を見張って聞いてくれた。明るく、表情が豊かで、コロコロと玉が転がるように笑った。

それにひきかえ、同書の「清掃屋の社長」では「たしかに美人だな――苛立つ気持ちとは裏腹に、ぼんやりと思った」という具合に、麻紀の場合の描写とは大違いの簡潔さである。

このように「美女ではないが」から始まると、かえってその女性の魅力を語ることができそうである。そして結局は、情報の受け手は綺麗な女性を想像することになるだろう。（その反対に、「美女だが」から始まると、悪口になり、下品な女はより下品に、教養の無い女はより無教養に、性格の悪い女はより嫌らしいイメージを与えることになる。また「美人」で上品、賢く、優しいとなると、現実離れしすぎた人物となるか、登場人物としては、非の打ち所がなさ過ぎて、かえって魅力に乏しくなる。）こうして、真性「美女」でなくても魅力的、ひいては「美女」とみなされる女性の集合体が大きくなるのである。

そして最近の日本のテレビドラマや映画では、ミステリーに美女が登場するのはもはや「お約束」となっているため、以前に比べて「美女」という言葉を敢えてタイトルにつけなくなったように思われるのである。その代わり、美女が探偵役でないときに「おばさん」などといったお断りの言葉が用いられる傾向にあるようだ。

井上は、「美人の定義がひろがればひろいほど、（美容産）業界のうりあげはのびるのである」といい、「ようするに、美容産業のおもわくどおりに、ことははこんでいるのである」と断言するが、もともと「美人」や「美女」の言葉はリップサービス基本語彙である。それだけよく使われると、意味も広がり続けただろう。ただし、「綺麗な女性」には化粧品を売りつけやすい、少し誉めればどんどん買ってくれると、販売経験者（女性）から聞いたことがある。

〈美女ほど恐怖を演出できる？〉

ところで近年は日本でもハロウィーンが人気のイベントになりつつある。東京の六本木では平日の夜だというのに今年（2013）は午前２時になっても仮装した若者で賑わっていた。特に美形でモデル体型の女性が多く、彼女らの人気のコスチュームはマイクロミニ丈の看護師白衣であった。しかも血（赤色絵の具）に染まり、顔はゾンビのようなメイクである。美女はホラーのキャラクター（ゾンビ・ナース）になっても美女であることを誇示し長く美しい脚を自慢げに見せて楽しんでいるようであった。

美女が鬼女や怨霊になると、醜女のそれらよりも恐怖を与えるといわれる。その証拠に、少なくとも人気のある日本の怪談では、死後おぞましい幽霊になっても、生きていたときは美女であった。『番町皿屋敷』でも、お菊は美女である。（きっと元美女でなければ主役にはなれなかったという事情もあろう。）『四谷怪談』でも、岩はもともと器量良しであった。だからこそ、その顔が崩れたとき、より恐怖が生まれるのである。（能面でも美しい女の面には不気味な怖さがある。）ただ、このタイプの美女は、もともと楚々としてか細い、むしろ病的である。だが時代によってこのタイプが流行することもある。たとえば肺病で死にかけの美女に最高の美を認めるのである。

横溝正史の「死仮面」（1949）でも、冒頭からこのタイプの女性の描写がある。

> ....その女のいのちは眼にありました。/　いくらか碧味をおびた瞳は、深淵のようにすんで、まじまじと物を見つめるとき、対象となるものを、そのまま瞳のなかへ吸いとろうとするかのようでした。....いつも長い睫毛を伏せているのが、どうかするとうっすらと泪ぐんで....そんなとき、夜霧にぬれたような黒い瞳が、宝石をちりばめたように耀きました。
>
> ....その女のいのちは唇にもありました。/　彼女のわずろうている病気の常として、いつもヌレヌレと真っ赤に染まった唇は、健康的とは申せませんが、それだけにまた、男の心をそそらずにはおかぬほど、

蠱惑にみちたものでした。

....その女のいのちは、肌にもあったといえましょう。/　青く静脈のういて見える肌は、まるで上簇するまえのかいこのように、陽にてらすと、きらきらと向こうがすけて見えそうでした。

ここで作者は初めから「美女」とは書かなかったので、このように細かな描写ができたものと思われる。つまりこれからも「美女」という言葉は、説明をそこで完結させてしまう記号であることがわかるだろう。

〈眠れる美女〉

さて死体に「美」を纏わせるのは「メメント　モリ」の強迫観念と「朝には紅顔あって夕べには白骨となれる身なり」の運命を背負わされた人間が、少しでも「死」の恐怖から逃れることを望んだためではあるまいか。我々は皆、遅かれ早かれ「死体」になるのだ。（現実において、これが我々と「加害者」や「探偵」との関わりとの絶対的違いである。）そして美しい死を具現化する美女の死体は、ときに「眠れる美女」と言い換えられ、また美女人形として永遠にその姿をとどめたいという話も生まれるのである。その意味で、美女の死体には、美女犯罪者や美女探偵とは異なった背景や状況があるのだ。

前述のように「美女」で書籍のタイトル検索をすると「眠れる美女」のヒット数も多い。上記の「眠れる美女」（発表年不詳）で永井路子が「大変な美人」と表したのは、死蝋となって発見された大名の側室の生前の様子についてであった。死は永遠の眠りであり、眠れる美女とはまさに「死美人」である。死美人との言葉は先の引用からも分かるように黒岩涙香の翻案小説の題名だが、原作の『ルコック氏の晩年』とはまったく趣向が異なりおどろおどろしい。当然ながら涙香は当時の日本人の好みを踏まえてその題名を決めたのであろう。５ヵ月にわたって都新聞に連載されたので、「死美人」なる言葉は世間に浸透したと思われる。なにしろこの作品ではこの「死美人」や「美人」がまるで被害者の固有名詞であるかのごとく、次のように頻繁に使われるのだ。（引用は乱歩訳によるが「死美人」

や「美人」については涙香の言葉遣いに忠実である。）

そこは美人の居間らしく、装飾も立派である。....美人はカードの一人遊びをしていたらしい。....犯人が美人の胸につき刺したカードも、この内の一枚に違いない。

花の都巴里はただでさえ物見高いところであるが、例の死美人事件以来、モルグ（死体公示場）の混雑はとりわけ物凄かった。何しろ殺されたのが絶世の美人で、おまけにその胸にはカードが一枚つき刺してあったという前代未聞の怪事件であるから、一度そのニュースが全市にひろまるや問題の死美人を見て話の種にしようという野次馬連中で、毎日モルグはごった返す騒ぎである。

....被告の弁護士がすぐに立ち上がった。「....いずれにしても、前夜忍び込んで美人を殺したのは被告ではなく、被告よりも少し大きな靴をはく男であるということは明瞭であります」

判事は席にもどった被告に向かい、「被告は美人の写真を、自分の物ではなく、すりが紙入れにさしこんだものだというが....」

判事が読み上げようとする手紙はこの事件最大の証拠であった。陪審員は真剣な顔になって耳をすました。「恋しき鞠子さん、という書き出しです。鞠子さんとは即ち死美人の本名です。....」

乱歩は涙香の愛読者であった。それだけの理由ではあるまいが乱歩のミステリー小説には、死体になる女性が多い。乱歩において同性愛の傾向を指摘する者が根拠とするのも、登場する美女が殺されて人形にされる点である。つまり生身の女性が描けないのは彼が男性にしか興味が無いためだというのである。確かに彼が描いた３人の女性悪党は『陰獣』（1928）の小山田夫人、『恐怖王』（1933）の夏子、そして『黒蜥蜴』（1934）の緑川

夫人だが、小山田夫人は大江蘭堂という男性のペンネームを使い、あとの二人は男装の名人である。つまりどこかに男性性が与えられているのが乱歩の活動的な犯罪女性の特徴である。

しかしながら「死美人」は涙香のおかげで（おそらくは縁日の見世物小屋に集まる）大衆のエロ・グロ好みを反映した言葉として定着したようである。上記の『喘ぎ泣く死美人』や『猿と死美人』のように横溝正史もこの言葉を題名に使った。また「死美人」ではないが『壷中美人』、『蝋美人』、『石膏美人』などはいずれも美女が殺される物語をすでに暗示している。これらに比べ時代は新しいが、平龍生著「美女標本室の女」（1988）では、「生きている人間は自由にならないから嫌だ」と思う医師・加倉井雅彦が、フィアンセとの婚約を解消し、彼女の友人・八潟圭子に睡眠薬を与え、その同意のもとに「彼女の美しい肉体を永遠に安置」した。

いっぽう川端康成は、後期の代表作でデカダンスの名作中編小説とみなされている『眠れる美女』（1960）で、性的に衰えた初老の紳士が睡眠薬で人形のように眠らされた全裸の若い女性と夜を過ごすためのいわば会員制秘密クラブを描いている。人形に人格はないはずなのだが、にもかかわらず本物の女性よりも不思議な色気を発散する存在である。もちろん、だからこそ人形の価値があるわけで、何も感じさせない人形なら、ただの物体でしかないだろう。その意味で乱歩にしろ耽美主義的な作品に女の人形あるいは人形のような女が登場するのは理解できよう。川端のこの作品でも、性行為や質の悪いいたずらをしてはいけないルールだが、人形として触るくらいはいい。

これは本来ミステリー小説には分類されていないが、狭心症で急死したセレブ会員の名誉を守るため遺体が温泉宿に移されたり、薬が多過ぎて一人の女性が死んでしまうというエピソードから、ミステリーとして読み解くことも可能であろう。殺人でなくとも、このクラブは警察沙汰にする気はないので、違法な死体の処理方法を推理するだけでも充分にミステリー小説になり得る。しかもこの女性と夜を共にしていた男性に強めの睡眠薬が与えられるところで話は終わるのだ。ひょっとしたらこの目撃者も消されるのかもしれない。ちなみに、この作品については三島由紀夫の代筆説

もあり、それこそミステリアスである。また日本で２度、海外で３度も映画化されたことからも、味わい深い作品であることがわかるだろう。

さて涙香の文章が1950年代になると古くて読みにくくなり江戸川乱歩が『死美人』の現代語訳を出した。（乱歩はエドガー・アラン・ポー作品の翻訳者と記されているが、作業をしたのは渡辺温である。従って涙香についても実際に乱歩が現代語訳を行ったかは疑問ではある。）だが古いのは言葉ばかりではなかったせいであろう、この乱歩訳の『死美人』は彼の人気にもかかわらず読者の支持をえられなかったようである。と同時に、そろそろ黒蜥蜴のような女盗賊に人々が魅力を感じ始めたのではあるまいか。三島由紀夫が乱歩の『黒蜥蜴』を戯曲化したのは1962年のことであったが、この公演は評判がよく、すぐに大映が京マチ子を主役に映画化した。まもなく丸山（美輪）明宏が主役の映画も製作され、三島がチンピラ役で登場する。現在ではこの美しい女賊が、明智小五郎を追い抜いて、乱歩の代表的な創作人物であるといっても過言ではあるまい。

〈女賊〉

美しい女性が悪事を犯す話は何も20世紀の半ばまで待つ必要はない。シェイクスピアのマクベス夫人にせよハムレットの母親にせよ、悪事に加担していた。（もちろんシェイクスピアの時代、これらの役は男優によって演じられたのだが。）18世紀に西欧で流行るピカレスク（悪漢）物語においてもピカロ（男性）に対してピカラ（女性）がいた。しかしどんな物語にせよヒットして後世にまで残るのは魅力的な女悪党であり、その条件のひとつに恵まれた容姿があげられよう。日本においては歌舞伎の女悪党たちを魅力的に登場させたのは四代目鶴屋南北であろう。『桜姫東文章』（1817）の桜姫や『盟三五大切』（1825）の芸者小万など悪事をやり遂げる大胆さとその美しさで今でも観衆を魅了している。（ちなみにこれらも歌舞伎役者という男性によって演じられるのである。）

だがミステリー小説という新分野では、美しい女賊の登場は「死美人」より遅かったと考えられる。実際問題として女の弱い腕力での犯罪には方法に限界がある。殺人に限って言えば酒、毒、薬を用いる方法が主で、刺

殺や撲殺、絞殺は（状況によるが）単独犯では難しい。つまり血を流さないで死に至らしめる話が多くなるはずである。（ピストルなら可能だが、時代・場所が限定される。パイナップルこと手榴弾ならますます限定される。）『源氏物語』で六条御息所は生霊となって葵の上を殺す。まさにミステリーだが、このように怨念や呪いといった超次元的パワーを物語で女性が使うのは、実際的な力に乏しかったからであろう。

その点、旧約聖書外典に登場するユダヤの女傑ユディトは乳母と二人がかりとはいえ、そして敵将ホロフェルネスが酒を飲み過ぎるなどして寝入っているとはいえ、その首を掻き切ることができたのは、不思議なほど珍しい話である。だからこそ西洋美術のテーマに好んでこの物語が用いられているのであろうが、この話も視点を変えればミステリーとして謎解きの機会を提供してくれるのではあるまいか。

すると女性が頭を使うことで目的を遂げるという物語が求められよう。殺人事件ではないがシャーロック・ホームズ・シリーズの「ボヘミアの醜聞」（1891）では、（ボヘミアの皇太子の愛人になったのだからおそらく美人の）オペラ歌手のアイリーン・アドラーが王を脅迫し、ホームズをも出し抜くほどの手際の良さで、皇太子時代のボヘミア王とのツーショット写真を持って逃げた。彼女はホームズを魅了した唯一の女性である。だが舞台人の彼女は男装が得意で、その姿のままホームズに声をかけたこともあるほどだった。並の女性ではないことを男性作家自身が納得するため、このような男性性を与える結果になったのではあるまいか。なお、ホームズを失敗させた女性は、彼女だけである。

〈ファムファタル〉

直接に犯罪に手を下すわけではないが、よく「事件の陰に女あり」と言われる。これは「表」での実行犯が男性である、つまり悪事は男性が犯すものとの前提が認められよう。なぜなら女性は受動的存在であったからだ。だが事件の陰で男性を操ったとなると、女性は「誘惑者」となり、実行者よりも悪魔的とみなされてしまうのである。「ファムファタル」とはときにはそんなチャンピオン級の悪女で「死をもたらす女」だが、殺人鬼では

ない。彼女の意向に従う実行者が現れるのだ。19世紀末のファムファタルはサロメに代表されるように、そんな誘惑者であった。

だが、本人の意向とは無関係に殺人がその周りで起き、それが美女たる彼女に思いを寄せる男の仕業だった、といった物語もある。これについても、この女性を「ファムファタル」と呼べる。彼女に悪意も責任もないが、その存在自体が「死をもたらす」のである。具体的には横溝正史の『女王蜂』（1951－2）のヒロインだ。彼女については次のような説明がある。

> 昭和二十六年五月二十五日をもって、満十八歳になる大道寺智子の美しさは、ほとんど比べるものがないくらいであった。
>
> 母の琴絵も美しかった。しかし、その美しさはあくまで古風で、ひかえめで、なよなよとして頼りなげであった。それにくらべると、智子の美しさには積極性がある。彼女は純日本風にも、また、現代式にもむく顔である。瓜実顔といえば瓜実顔だが、いくらかしもぶくれがして、両のえくぼに愛嬌がある。それでいて、おすましをしているときの智子は、神々しいばかりの気高さと威厳にみちていた。といって、冷たい感じがするというのではない。なんといったらいいのか、智子の美しさにはボリュームがあった。そこに彼女と母との大きなちがいがある。....
>
> とにかく諸君があらん限りの空想力をしぼって、智子という女性を、どんなに美しく、どんなに気高く想像してもかまわない。それは決して、思いすぎということはないのだから。

多くの言葉を使ってはいるが、それでも抽象的で、智子の美しい顔についてはよくわからない。この少し後に彼女は色気をおびる。

> 炎えるように赤いアフタヌーン、黄金のネックレスに黄金のイヤリング、腕にも黄金の腕輪をはめて、長くひいた眉、真紅にぬった唇。それはまるで烈日の下に咲きほこる、真紅なダリヤのように強烈な美しさだった。しかも変わったのは服装や化粧の好みばかりではない。

耕助の顔をみて、にっこり笑う流し目にも、妖婦の媚びがあふれている。

ここでは彼女の顔の美しさよりも、全身の美しさを丁寧に分かりやすく描いている。前述の寺田の意見を聴くまでもなく本来は美人も美女も、顔の美しさが重要なはずだ。たとえば「美女だけれど足が太い」などとはいえても「美女だけど顔が不細工」とはいえないのだ。体の一部分について語る場合は「足美人」、「肌美人」、そして内面の「性格美人」や全体の「雰囲気美人」という俗語が昨今では使われるが、顔が美しければ、このようなパーツ別に分けることなく「美女」という言葉でカバーできるはずなのである。だが作家としてはファッションまでを描くことにより、「美女オーラ」を伝えたいのであろう。顔が美しくても地味で野暮ったい服装では、美女に見えないことも現実にはあるのだ。（たとえば以前、大阪府庁の職員でそのような女性を見かけたことがある。「掃き溜めに鶴」と私は彼女の上司に告げたが、彼は「まさか」という表情をした。なによりもったいないことに、彼女本人も自分の美しさに気付いていないようだった。）

もっとも我が国では伝統的に全身の所作の美しさを重要視する風潮もみられる。美女の様子を表すのに「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」という比喩が使われてきた。これも具体的なイメージを抱かせない表現だ。それにしても、これらの花を組み合わせるとなんと派手な女性が誕生することであろうか。

『女王蜂』で興味深いのは、智子がファムファタルに成長してゆく様子が描かれていることである。同様に、東野圭吾の『白夜行』（1997－9）でも、ヒロインの唐沢雪穂は成長する。小学校の児童だったときの彼女は、家を訪ねた刑事・笹垣の目には「目の大きな少女」、「陶器のように肌理（きめ）の細かい、白い頬をしていた」と写る。「美少女」とは断定していない。この後、雪穂は魅力的に成長する。中学生になると近くの男子校の生徒からアイドル的存在になり、写真を盗み取りされたりするのである。顔については「上品な猫を連想させる」目、で「下唇がわずかに厚めの口は、かわいい笑みを浮かべている」とあるが、雪穂の魅力は容姿だけでは

なく、むしろ「感性が豊か」、「会話を楽しくすることでも天性の才能を持っていた」と、その知性や感性にもあったのである。つまり、たんに美しいのではなく、これらのことが総合的に彼女の魅力を作り出していたのだ。だが、もちろん、すべての男性が彼女に惹かれるわけではない。「素朴」な女性のほうが気になる男性もいる。恋愛とはそういうものである。それについては後述する。

同じく東野圭吾著『幻夜』（2004）でも、初めて雅也が美冬を見たときには阪神大震災の被災地であったこともあり「二十代半ば」、「化粧気はなく、長い髪を後ろで束ねて」おり、「顔が小さく顎が細」く「やや吊り上がった目を見開」いている。スエットスーツを着ていたためでもあろうが「美女」との説明はない。それゆえに、彼女の容貌が作品中で進化してゆくところに作者の思い入れが感じられるのである。彼女が銀座の老舗宝石店「華屋」に勤めているとき、「美人」と噂されるがそればかりではなく、彼女の登場シーンはこのように描かれる――「白いスーツを着た新海美冬が歩いてくるところだった。モデルのように姿勢がよく、歩き方も美しい。しかも毅然とした風格のようなものも漂わせている」。次に美冬が青江の働く美容院に頻繁に行くようになると、店で話題になる――「絶対にモデルか芸能人、さもなくば超高級クラブのホステスだ、と若い女性スタッフたちはいった。一般人にあんな美人はいない、と」。

だが彼女の結婚相手で華屋の社長・秋村隆治は美冬の美しさもさることながら、その頭の良さに惹かれたのである。彼はプロポーズするときに自分が独身を続けていた訳を説明する――「僕が今まで身を固めなかった理由はただ一つ。頭のいい女性に巡り会えなかったということだ。君はこれまで会った女性の中で、ずば抜けて頭がいい。そして頭がいい女性というのはしたたかなものさ。そう、見方によっては悪女と誤解されるおそれもあるね」。そのような隆治だから、結婚後に美冬が美容整形を繰り返すことが理解できない――「心が引き込まれそうになる目だ。それは前と変わっていない。しかし鼻筋のスロープは一層完璧さを増し、顎は鋭利になっていた。そして皺が一本も見当たらない肌からは皮膚感が消えていた。/人形のようだ、と隆治は思った。あるいはコンピュータ・グラフィックで描

かれた顔だ。人工の香りに満ちている。」こうなると「美」とはやはり見る者の主観によるのだ。隆治は美冬にこの後も操り続けられるだろうが、もはや彼女を美しいとは思わないはずである。

〈女性探偵〉

被害者と加害者の次にミステリー小説で必要なのは謎解き役である。この作業が女性に任されたのは、死体や悪役よりも遅い。実際問題として、謎解きには捜査権が必要である。つまりしかるべき社会的地位が与えられない限り探偵役は果たせないのだ。たとえば女鼠小僧は可能でも、女銭形平次、女大岡越前守、女遠山の金さんは社会制度の観点から無理だったのである。さらには女性に謎解きの能力があるとはみなされなかっただろう。

西洋においても、教育を受けられる階級の女性にガヴァネスのような職業の道しかなく、結婚ができれば家庭におさまった時代においては仕方があるまい。しかも探偵は、危険が伴う仕事でもある。女性探偵が初めて描かれたといわれているのは、バロネス・オルツィのレディ・モリーのシリーズ（1910）である。原題は『スコットランドヤード（ロンドン警視庁）のレディ・モリー』で、なんと正式に女性が英国の警察に採用される４年前に描かれたことは女性の社会進出を考える上で意義深い。1914年に第一次世界大戦が始まり、労働力不足を女性の力で補わなければならなかったというのが実情であり、決して女性の地位が上がったためではないが結果的に社会進出に拍車がかかったのである。だがおそらくは1910年にバロネス･オルツィがこの作品を発表しても､突拍子もないとまでは思われなかったような社会背景があったのではあるまいか。

ここで特筆すべきはヒロインのモリーは貴族階級に属していることであろう。作者自身もハンガリーで男爵令嬢として1965年に生まれたのだが、農民の蜂起によって屋敷や農場が焼き払われ､一家はブダペスト､ブリュッセル、パリへ移転し、彼女が15歳のときにロンドンに落ち着いたのである。経済的には豊かでなくても英国の上流階級には受け入れられ、それはレディ・モリーを描くのに役立ったはずである。しかもレディ・モリーは

伯爵令嬢である。ちなみにバロネス・オルツィの母親もハンガリーの伯爵令嬢であった。令嬢の場合、伯爵家以上でなければレディの称号は使えない。そのためこのような家柄の設定となったのであろう。

レディ・モリーはフランス人女優だった母親譲りの美貌の持ち主であるが、この母親の最初の夫・サー・バドックの孫ヒューバート・ドゥ・マザリーン大尉と結婚する。ところがその直後に大尉が無実の罪で逮捕されて20年の懲役刑に服することとなり、彼の帰りを待ちながら1904年から９年までレディ・モリーは警察の捜査課下級職員として働くことになったのである。（５年後、彼女は夫の無実を証明し、出所した彼と結婚生活を送るべく警察を退職する。）

レディ・モリーの捜査は、いつも女性の目線を大事にする。物語は彼女のパートナー、メアリーが記述するという形式で、シャーロック・ホームズとワトソンの関係を連想させる。そこで気になるのは平民のメアリーが貴族のモリーについて、階級の違いを意識してか、とにかく誉めまくることである。また捜査においてレディ・モリーの女性の力が発揮されることをメアリーは強調する。「ナインスコアの謎」では貴族の愛人になって子供を産んだ女性の姉が殺された事件で、モリーは「赤ん坊は....救貧院行きよ」（鬼頭玲子訳）と母親を挑発し、子供の父親の名前を巧妙に聞き出す。そのやり口についてメアリーは「母としての誇りを心底まで傷つけて....自白を引き出すことが、男性にも可能だったとは言わないでもらいたい。男性がどんなに頭をひねっても引き出せなかった自白は、こうして得られたのだ」と記すのだ。

さらに「フォードウィッチ館の秘密」は、このような書き出しで始まる。

> ヤードでも指折りの腕利きが手も足も出なくなったとき、主任が自ずとレディ・モリーを頼りにするのに、なんの不思議があろうか？／いわゆるフォードウィッチ館の秘密だが、いつもにもまして女性の機転、洞察力、人並みすぐれたレディ・モリーの資質全てが必要となる事件だったことは間違いない。

また「大きな帽子の女」では容疑者を小柄な女性と推理し、事件を解決した後、レディ・モリーはこう語る――「もしマティス・カフェに現れた女が大柄だったら、帽子のサイズがずば抜けて大きかったという印象をウェイトレス全員が持ったりはしなかったでしょう。その女は小柄でなければならないのよ。だから広いつばの下から顎しかみえなかったわけ。だから、すぐに背の低い女性を捜したの。みんなは思いつかなかったみたいね、男だから」

これほど捜査において女性であることの優位さを強調しなければならなかったのは、それだけ女性の探偵役が世間で受け入れられにくい時代であったことを表しているだろう。しかし実のところレディ・モリーが有利であったのは、彼女が伯爵令嬢という特権階級に属していたことである。ヤードの下級捜査員では到底相手にされないような名門貴族であっても、彼女なら遠慮なしに対等に付き合える。彼女が登場するときには美女オーラばかりか、それ以上にセレブ・オーラが発揮されるのである。「フルーウィンの細密画」ではユダヤ系英国人富豪の屋敷でも、彼女は堂々としている。犯人を見つけるために罠をかけ、メアリーに手伝わせるのだが、予想外の展開にメアリーが当惑していると、レディ・モリーは優しいきれいな声で語りかけて姿をあらわす。

> 「お望みならお金を受け取ってもいいわよ、メアリー。その人に包みを渡しても構わないわ」ウェストラインの極端に高い総裁政府時代風の美しいドレスを上品かつエレガントにまとったレディ･モリーが、微笑みながら立っている。

このあとレディ・モリーは、セレブの家庭事情を理解し適切なアドバイスを与えて事件を解決するのである。そこでは男女の違いによるものではなく、やはり財産管理の経験の有無という階級差が能力に関わったのだ。レディ・モリーのやり方はホームズほど論理的ではなく、囮捜査が多い。女性の能力というより「女の勘」に近いかもしれない。レディ・モリーを

女性探偵第一号とするのに抵抗があるのは、彼女が「レディ」の立場を最大限利用している、つまり女性でも王位につける大英帝国における話で、性差より階級差を活用しているためであろう。逆に考えれば、この時代のフィクションとして女性であることのハンディを、まずは階級差で補う必要があったのかもしれない。彼女を美女としたのは、出来うる限りの長所を付加させ読者を納得させるためであろうが、やはり容姿よりも「レディ」のインパクトが強い。本文でレディ・モリーについて「美女」と断言してしまったので、かえって印象が薄いだろうし、彼女が美しい容姿を仕事に利用する機会がなかったことも、読者にレディ・モリーが美女であったことを忘れさせる一因であろう。

そう、探偵には「美女」でなければならない必然性がないのだ。被害者は美女であるがゆえに犯罪の対象となりうるし、男性を操る女性も「美女」であれば説得力が増す。だが捜査能力と「美」は無関係なのだ。（警察官の募集に容姿端麗などの条件がつけられるはずがない。）後年にアガサ・クリスティが描くミス・マープルなど、若くも美しくもないが名探偵である。そしてその物語はロングセラーでドラマや映画も常に人気がある。探偵役に美女を配するのは、謎解きの幼稚さを誤摩化すためと、テレビにおいてはとりあえず視聴率を上げるための手段なのではあるまいか。東野圭吾はエッセイで、原作では男性探偵なのにテレビドラマ化されると美人探偵に替えられてしまうこともある旨、記している。巷ではそれほどに「美女」が求められるのであろうか。

和久峻三などは探偵が美女である必然性を納得させるためか、「芸者弁護士藤波清香事件ファイル」シリーズを著わしている。弁護士ではなく芸者にとって容姿は重要であるが、それにしても苦しい設定だ。（いっぽう六条蔵人著『美女探偵・美沙・花嫁略奪計画』というタイトルに着目して本をめくったところ、官能小説であった。それなら「美女」は求められよう。またコミックで『ピアストラブル：美人探偵ミミさんの場合』は耳鼻咽喉科の啓蒙書のようなものだが、漫画ではヒロインはあり得ないほど大きな目と小さな口の持ち主に描かれるのを常としているので、「美人」とされても、その他の作品の主人公にくらべて綺麗でも可愛いわけでもない

という事態が生じるのである。）

また堀田延著『マダム・マーマレードと暗い日曜日』（2013）のマーマレードはニューヨークの凄腕女探偵である。「マダムと名乗ってはいるが、年齢はまだ二十歳そこそこだろう。長い髪はビロードのような光沢を放ち、白く透き通った肌は真珠のようにきめ細かに見えた。黒みがかった茶色い瞳と淡いピンクの唇で、人を見下すような冷たい微笑みを浮かべているが、それでも決して不快には感じさせない。そんなどこか人の心を強くとらえて離さない不思議な顔立ちをした美女だった」とある。残念ながら、この描写では「美女」とは想像できないのだが、作家はヒロインが才媛であることの段取りをしたつもりなのだろう。いずれにせよ、この場合も事件解決に彼女の容姿は関係ない。ヨーロッパまで出張する体力は必要なので、椅子にすわったままの探偵では困るのだが。

〈美女は求められる？〉

美女を歓迎する気持ちはわかるが、なにがなんでも「美女」を求めるのは文化的に未熟なのではないかと疑問を抱きたくなる。（ミステリーから離れて申し訳ないが、エドワード八世が王冠を捨てて妻に選んだシンプソン夫人はおしゃれだが決して美女ではないし、チャールズ現英国皇太子は美しいダイアナ妃ではなく、お世辞にも美女とはいえないカミーラを愛し続けたではないか。）

しかしどうも日本では「美女」を求める傾向がより強いように思われる。たとえばジョン・ミナハン著『美女はダイアモンドがお好き』の原題はThe Great Diamond Robberyつまりダイアモンド強奪大事件で、「美女」との言葉は翻訳者が勝手に入れたのである。おそらくは日本の読者をダイアモンドと美女との華やかなイメージで釣ろうという狙いによるものであろう。なにしろ『＊＊は＊＊＊＊がお好き』というタイトルは大ヒットした米国映画『紳士は金髪がお好き』（1953）を連想させるものである。この映画でマリリン・モンロー演じるローレライは『ダイアモンドは女の子にとって最高の友』（Diamonds Are a Girl's Best Friend）を歌うし、彼女はダイアモンドのティアラ泥棒の疑いをかけられるのだ。つまりこの小

説は邦題で、マリリン・モンローの美女イメージを借りるというきわめて姑息な手段を用いたのである。

そこでおそらく日本の読み手はモンロー的美女の登場を期待して読むのだが、果たして本文中に「美女」も「美しい」という意味の直接的な言葉も、この女性犯罪者タラについては使われないのである。その代わり、「二十代半ばに見えた。黒髪は束ねずに長くて、目は黒い。頬骨は高くて、化粧はあまりしていない。『ヒル・ストリート・ブルース』で弁護士ジョイス・ダヴェンポートを演じる女優ヴェロニカ・ハメルを連想させる」（木村仁良訳）とある。

実在の女優名を出すのは、読者に知識があれば有効であるが、かなり小説の流通範囲を狭めて賞味期限を短くする危険な手口である。グーグルで検索してみると、なるほどヴェロニカ・ハメルは美人系ではあるが、彼女を「連想」させるタラをことさら「美しい」とは書いていないのである。「弁護士」なる職業も美女であることを求めない。またこの作品で、タラが美女であるか否かは物語の展開を左右しない。従って作者はタラを美女とは決定しなかったのだが、それでは翻訳者としては日本市場において不都合が生じる。なんとしてもタイトルには「美女」を入れたかったし、入れる以上はどこかで辻褄を合わさなければならない。そこで、本文中での美女不足を、翻訳者は「あとがき」で次のように解決した。

> おれがジョン・ミナハンの「美女はダイアモンドがお好き」を読み終えて、本をとじると、黒い髪の美女がにっこりほほえみながら、むかいの椅子にすわった。....ブルック・シールズそっくりの顔だった。

ブルック・シールズなら日本人でもイメージできる女性だし、この小説がアメリカでテレビ映画化されたときのタラを演じたのがこの女優だったのだ。それにしてもとうとう「あとがき」に本文とは無関係の美女を登場させたのである。そこで翻訳者はこの物語のあらすじをこのように語りだす――「一九八二年三月十七日に、タラ・マルヴァラードという美女が一千百五十万ドル相当の十二個の宝石を盗む計画をかつての悪友に持ちか

けられ、警察に通報する。それで、ニューヨーク市警のリトル・ジョン・ローリングズ刑事と相棒のブレンタン刑事が捜査を始めるという話だ」本文では「美女」という言葉がなかったにもかかわらず、ここで訳者はこうして邦題に合わせるべく美女のイメージを補充したのである。

まあ原作者の頭の中ではタラは、（美人）女優・ヴェロニカ・ハメルとして動いていたのだろうから、この邦題も嘘とはいえない。だがタイトルに「美女」の言葉があって最期までこのような状態の「美女」の登場しないのが、和久峻三著『氷づめの美女：芸者弁護士藤波清香事件ファイル』（2009）である。確かに美しい芸者・染子が睡眠薬で眠らされて一酸化炭素中毒で殺され、裸にされて彫刻のための全身の型をとられる。それをもとにして「不滅の美」をテーマにした『裸婦A』が製作されるし、そのアトリエには冷凍室があるのだが、死体の保存に使われたとも、ここの氷で腐敗を遅らせたとも記述はない。捜査員や探偵はただ「アトリエに冷凍室があるなんて､不思議なことじゃありませんか？」と不審がるのみである。しかも結局は染子の白骨死体が発見されるので、いったい「氷づめ」はどうなったのかそれこそ「不思議」である。同書では凍結保存された受精卵も事件と大きく関わるので、もしかしたら「氷づめ」とはこちらのことかと意地悪く考えたくなる。

では美女はもてるのだろうか？　ふつうはそう考える。美女は容姿の劣る女性に比べて愛されるはずであるとの思い込みが一般的にある。この「思い込み」を利用して描かれたのが、アガサ･クリスティの『ナイルに死す』（1937）である。誰もが「金髪、横柄なところのある整った顔だち、見事な身体つき」（西川清子訳）の「美人」である大金持ちのリンネット･リッジウェイのほうが、「ほんとの美人というわけではないけれども、黒いちぢれ毛、大きな目で人を引きつける」ジャッキーよりも男性から愛されると信じてしまうのだ。だが恋愛とはそんな単純なものではない。前述の『白夜行』で雪穂は多くの男性たちから憧れられるが、それでも彼女より目立たない女性に魅せられる男性もいたのだ。（そのような現実をちゃんとミステリー小説において描く東野は、やはり「実力派」である。）

さて本論で実話に言及するのはルール違反かもしれないが、まさに「事

実は小説よりも奇なり」なのである。2009年に発覚した木嶋佳苗容疑者の関係する結婚詐欺と連続男性不審死についてである。2012年に裁判（一審）が行われ死刑が言い渡されるのだが、彼女は殺人については前面否定。この裁判をマスコミが注目したのは、木嶋容疑者が美女ではなかったからである。裁判を傍聴した北原みのりは記録を単行本『毒婦』（2012）にまとめたがそこで次のように記している。

> 誰もが彼女の容姿に色めきたった。どうしてこんな容姿で、男たちを次々に騙せたのだろう。もし彼女が美人であれば問われなかったようなことが、まるで大きな問題のように扱われ報道された。

これまでマスコミは「美人」や「美女」の言葉をつけて事件やスキャンダルをより大きく報道する傾向が顕著であったのに、木嶋佳苗容疑者については美女でないことが皮肉にも話題性を高めたのである。だがさらなる意外な展開は、美形でないのに、彼女が魅力的だったことである。約２年４ヶ月の勾留にもかかわらず、37歳の彼女は「生き生きと、キレイだった」とある。また肌は「シミ一つない完璧な白、絹のような美肌」なのだそうだ。そして声は「あまりに優しく上品」で、とうとう男性記者たちが休廷中にこんなひそひそ話を始める――「思ったほどブスじゃない」、「声、可愛くないか？」、「十分イケル」、「見ているうちに、どんどん可愛くなってきた」

さらに彼女の所作が次のようにエレガントらしい。

> ボールペンは100円のノック式のものだが、ノックの仕方が、なんていうか、優雅なのだ。ペンを少し傾けゆっくりと親指で押す。書き終わったら丁寧に芯を戻し、ファイルの背に挟む。一つ一つの所作がきれいだ。....また、佳苗のそばには５人の男性弁護士がついているのだが、パソコンを打ち、額に皺をよせ、頻繁に「異議ありっ！」と突っ込む男たちは、佳苗を全力で守る取り巻きのようにすら見えてくる。

なかでも髭の生えたイケメン弁護士と休廷中に満面の笑みで話していた佳苗は“楽しそう”だった。無表情の佳苗が笑うと、パーッと柔らかさが増す。とても感じのいい女、だ。

挙げ句の果てに、美人記者が自分よりももてていた佳苗に立腹してしまうのである――「だいたい私なんか、今まで１度しか、プロポーズされたことないっていうの！佳苗はいったい何回プロポーズされてるんですか！....いったい、なんであんなブスが！ブスなのに！どうして！どうしてだと思いますか！」

幸せな人生を約束されているはずの美女をこれだけ苛立たせるほど、佳苗容疑者には独特の魅力があったわけである。ミステリー小説の「お約束」を根底から覆すような事件だったが、もちろんというべきか、多少のフィクションを加えて２度テレビドラマ化された。世間がそろそろワンパターンの美女がらみのミステリーに飽いたころの新鮮な話題となったはずだ。これらは実話をもとにしているから視聴者も納得するのだが、やはり100％フィクションでは、この設定が受け入れられるとは思えない。それほど物語世界のほうが保守的だといえそうだ。つまり現実は現実として、ミステリー小説のような娯楽において、人は自分好みのあるいは自分が魅せられるようなキャラクターが登場し、自分好みの、あるいは自分が夢中になれるような展開をする物語を求めているのだ。

どんな役割を当てられようが「美女」はそんなキャラクターの最大公約数の資質といえそうである。しかも女性が社会進出しつつある現代では、死体にとどまらず、かなりの知恵者として犯罪に加担する悪女や実行女性犯、あるいは本格的なキャリア・レディとしての探偵役にこそ注目が集まり、とりわけ映像においては彼女らを主役に据えるため美女の登用が当然になってきたと考えられるのである。けれども今後、女性の社会進出がもはや話題にならないほど当たり前になったとき、ミステリー小説において美女たちの役割にまた変化があるかもしれない。残念ながら日本においてはかなり遠い未来でのことになりそうだが。

注）本論は2013年11月16日に大阪府立大学I-siteなんばで行った講演『ミステリー小説の美女いろいろ――比較文学的に考える』をもとに加筆・改稿したものである。